慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二、最近のギリシヤ史界
Sub Title	
Author	平山, 榮一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.148(476)- 153(481)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	海外史壇紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Nogara 氏はギリシヤ建築に對立させてエトルリヤ傳統のローマ建築樣式を主張するのである。ローマ史との連絡に於て誠に興味深いものがある。

六、エトルリヤ人の文學の問題

エトルリヤ人の文學は何一つ殘つてゐるわけでは無いのであるが、Nogara 氏はエトルリヤに文學があつたか、と云ふ問題を提出して、凡ゆる點から見て文學があつたと云ふ結論に到達してゐるのである。ローマの史家が云々する敎義(doctrine)の書は後の編纂になるもので恐らく口碑によつて傳へられたものであらうが、その占ひその他をふくめて宗敎文學は或程度まで科學的であり心理學的なものであつたらしい。詩歌の存在も容易に想像され、殊にその敍事詩はローマの建國史の材料に使はれてゐるらしく思はれる。Varro は Volnius なるものがエトルリヤの悲劇を書いたと云つてゐるが、この方面に於ける傳統も相當古くからあつたらしいのである。Nogara 氏の師 Elia Lattes はイタリヤの古詩 Saturnius の起原をエトルリヤに結びつけてゐるが、之は未だ學界の認める所となつて居らない。

Nogara 氏のエトルリヤ研究の力點はローマ史との關聯にある。（一九三七、六、一六）

二、最近のギリシヤ史界

平山榮一

(Revue historique, Tome CLXXVIII, Sept.-Oct., '36 所載 Paul Cloché 氏の報告 Histoire grecque (1931—1933)による)

一、通史　M. Cary, A History of the Greek World (323—146 B.C.) 本書は上述の年代に於けるギリシヤ世界の歷史の極めて明確な敍述である。本書の最も興味ある見解は(一)、ヘレニスチック時代に於て、戰爭は古典時代に於けるよりも、科學的、人道的となつた。(二)、君主はこの時代に於て最も活動的であり、無爲の王 (rois fainéants)

は極めて稀れであつた。(三)、諸都市は民主政治的外見の下に金權政治的組織を有した。(四)、經濟的進歩は主として商業方面に行はれ、それが衰微するに至つたのはローマの過重な干渉が原因をなしてゐる。――その他、明かにされてゐるものは、新藝術の世俗的特質、學藝保護者の役割、傳統的信仰の衰微、君主崇拜と折衷主義などであり、全體の結論として特に著者の力説するところは、近東の支配的要因たるヘレニスチック・ギリシヤによつて行はれた豐富なる活動といふことであり、ローマ共和國はそれに從つて、文明的帝國となり、その影響は近代的科學の形成と恆久的宗教の到來に有力なる貢獻をなした。

二、特殊史(一)、G. Radet, Notes sur l'histoire d'Alexandre; VIII: Alexandre à Troie. Étude complémentaire (R. É. A., 1932, p. 119—136). Ch.-Vellay の見解に反對し、G. Radet は、ホーマーのトロイはヒサルリックであるといふ說を述べて曰く、考古學の證明する如く該地方に於て三、四千年間にわたり住居の存したのはヒサルリックのみであるが故にギリシヤ・ローマ時代のイリオンは卽ちホーマーのトロイである。ヒサルリックは非常に小さく、ホーマーの詩はトロイを大であると述べてゐるのは事實なるも、必ずしも詩的想像に追從する必要はない。また多くの著者(ヘラニコス、ヘロドツス、クセノフォンなど)は、ホーマーのトロイが殘存せりとの强きギリシヤ人の信念を證明してゐる。最後に Vellay の認むる如くアレクサンダーが、アジヤ遠征に方り、イリオンを訪れたといふことは有り得べきことなるのみならず、確實なることであり、彼のイリアドに對する熱愛がこの町をホーマーのトロイと同一なりと考へたことは疑ひ無きところである。(同報告の別の部分、『考古學及び發掘』の項には小アジヤに關

して次の如く述べてゐる――C. Blegen が、W. Heurtley; Doerpfeld; W. Semple の協力を得て指導した發掘の結果、ヒサルリック城砦の內部に於て、一のローマ時代の層及び二つの先史時代の層に遭遇し、またローマの建設物（トロイ九層）に達し、また丘の西北及び西側の斜面に火葬せる（？）墓の遺片及びローマの土器の外にミニアン（minyen）及びミケネの花瓶を發見した。高原の西部に於ては、一の大なる建物が發掘され、劇場及び扇形の城壁が見出された。劇場の發掘はヘレニスチックとローマの時代とを區別させた。最後に多數の金・銀・青銅・象牙などの製作物と、ヘレニスチック時代よりビザンチン時代に至る五百十二個の貨幣が發見された。――Ch. Vellay によれば、最近のアメリカの發掘はヒサルリックの地點をホーマーのトロイと一致させることの不可能を證明した、何となればこの大なる町トロイは決してヒサルリックの城壁內にあつた筈はなく、そのミケネ時代の層は一定の居住地ではなく、たゞ火葬の場所たりし證跡を與へるのみである。ヒサルリックの周圍には低い町は無いが、それは、低い町の無いアクロポリスであつたか、或はアクロポリスの無い都市であつたかといふことになり、イリヤドの敍述及び古代の史料と矛盾する。（Ch.-Vellay, Les fouilles d'Hissarlik. Troia iterum extincta —Bull. Assoc. Budé, janvier 1933, 11 p.）

（二）、F. Maurice, The Campaign of Marathon (J. H. S., 1932, pp. 13—24) マラトンの戰に關するF. Maurice の說明は次の如くである、――ダチス（Datis はペルシャ王ダリウスの派遣した將軍で、第二ペルシャ戰役（前四九〇）に於て、アルタフェルネス（Artaphernes）と共に海軍を率ゐてギリシヤへ向つた）の率ゐたペルシャ軍が有名なマラトンの原に上陸したのは、騎兵を充實させるためで

もなく、また彼等の一派の陰謀の效果を待つてゐたのでもなく、それはまだエレトリヤ（エウボイヤ島にあるアテネの盟市）の攻圍に沒頭してゐたアルタフェルネスを掩護するためであつた。アテネ人はエレトリヤの救援に赴いたとき、マラトンにペルシヤ軍の存在するのを認め、かくて彼等はスパルタ軍の到來を待ちつゝアテネを護るため、そこに固く陣を布いた。アテネの將軍ミルチアデスは、エレトリヤ陷落の報を得て、彼等の恐るべき結合を妨げんとしてダチスの軍を急いで攻擊した、そしてダチスの軍は再び船にもどり、アルタフェルネスと結合した。兩者はミルチアデスの歸るに先立つてアテネを攻擊せんと廻航したが、失敗に終つた。要するにマラトンは史上の『最初の決戰』であつたのではなく、ペルシヤの『膺懲的』遠征に於ける一小事件であり、彼等の部分的勝利たりしものである。實際に侵入の道を防いだのはサラミスの海戰であつた。

(三)、P. Treves, Demostene e la libertà greca, Bari, Laterza, 1933. P. Treves の『デモステネスとギリシヤの自由』は興味に充ちた深い研究である。著者はいふに、ケーロネヤの戰（前三三八）はギリシヤの歷史劇の終末を劃するものではない。デモステネスはイソクラテスと同じく絕望することなく、アテネの愛國心を激勵するに專念した。彼は勿論それを、恢復の事業を危くせず、また光輝ある過去を否認せざるやう、極度の愼重を以て行つた。我々が『彼の政治思想の本質』を見出す彼の『王冠論爭』（アテネ人がデモステネスの功に報いるために與へた金冠に對し、エスキネスが反對したのを、デモステネスが論駁した事件）は眞の勝利であつた。要するに前三三八年より三二三年に至るまで、デモステネスは驚くべく『精神に武裝を施こし』、親マケドニヤ派と高尙なる愛

國者との聯合（三二四）の如き重大なる障害ありしにも拘らず、彼の努力は空しくなかつた。『彼の起こした戰爭』なるラミヤ戰爭（三二三年、アレクサンダーの訃報を得て、アテネがギリシヤ諸邦の叛亂を導き、マケドニヤの知事をテルモピレー附近のラミヤ（Lamia）の要塞に攻圍したが、マケドニヤの援軍來ると共にアテネは敗退し、デモステネスは逃れた、マケドニヤに對するギリシヤ諸邦最後の抗爭をいふ）は、彼の熱烈な要求に應じてアテネの指導の下に行はれた戰爭であり、三二二年の敗戰にも拘はらず、大雄辯家たる彼の經綸は決して亡びたのではない、と論じてゐる。

（四）、B. Breloer, Alexanders Kampf gegen Poros. Ein Beitrag zur indischen Geschichte. Stuttgart, W. Kohlhammer, 1933) B. Breloer はアレクサンダーのポロスに對する戰爭に就いて、細心な、深い研究を行つた。彼はヒダスペス河の横斷の戰鬪及び行程に關する大王の採つた意向を分析する。彼はそれの大膽なる性質を特に指摘し、大王により非常によく準備されたこの軍事行動の成功に於ける奇襲の重要な役割を說く。敵の戰線の弱點に向けて大王の指揮した攻擊の重要なることが明かにされた（敵の步兵は象と左翼の騎兵との間に配せられてゐた）。その用兵の驚くべき迅速さは、印度人を混亂に陷いれ、彼等の前線の全般的崩壞を起こしたこと、その破られた前線を立て直すためポロスの試みたる反擊の利害（その用兵は記錄に殆んど認め難い）、この行動の一時的成功と、結局の失敗、それはクインツス・クルチウス（アレクサンダーの歷史を書いた紀元一世紀のローマの史家）によれば、戰象に對するトラキヤ射手の强力な攻擊によつて崩れたのである……など。著者は最後に附言するに、ポロスの重大な軍事的敗北は、彼の政治的不幸を導かなかつた。アレクサンダー

はポロスが西方で失つた勢力をば、熟達せる勇敢な君主に對する充分な敬意から、東部及び西部で充分に返へした。（原註、この點に關し G. Radet, Alexandre le Grand の意見をみよ）もし大王が、部下の軍の隨從を得てゐたら彼は宿敵ポロスが數年後サンドラコトス（Sandracottos 或ひは Tchandragoupta）に奪はれることになつた大領土を征服することを助けてゐたであらう。

――右報告は一九三一――三三年のギリシヤ史界につき、(一)、考古學及び發掘　(二)、金石學　(三)、パピルス學　(四)、古泉學　(五)、一般史　(六)、特殊史　(七)、修史學　(八)、法律及び制度　(九)、經濟及び社會生活　(十)、宗教　(十一)、藝術　(十二)、文學　(十三)、地理　(十四)、雜　の各項に分けて詳述してゐるがこゝでは右の(一)の一部及び(五)、(六)の一部を紹介したのみである。

三、史學の國家主義的傾向について

田中荊三

Beard と Vagts の兩氏が『米國史學評論』に史觀の變遷殊に史學に於ける國家主義的傾向を述べてゐることは、デモクラシーの國アメリカの雜誌に於てであるだけに殊に興味あることゝ思ふ。以下 Charles A. Beard and Alfred Vagts: Currents of thought in historiography (The American Historical Review, Vol. XLII No. 3.) の大まかな紹介である。

兩氏は先づ興味と思想の動きが歴史を凡ゆる研究の王座に進めたことをとき、次いで現在人類に遵奉を命じてゐる三大政治思想――デモクラシーとファシズムとコンミュニズム――は、現前の事實としての行動性の歴史（History as actuatity）の説明に俟たねばならぬと云つてゐる。

そして長い間の歴史の諸相を取扱ふ歴史家が度々發生した政治や經濟の危機に無關心で象牙の塔に閉ぢこもつてゐることは出來ない。歴史家の書